

学習者のニーズ及び気づきを促進する質問紙法の事例研究 —TOEIC® リスニング応答問題の分析より—

長橋 雅俊

A Case Study of Questionnaire Method to Promote Learners' Needs and Awareness — From the Analysis of the TOEIC® Listening of Question-Response —

NAGAHASHI, Masatoshi

要旨

TOEIC® Listening & Reading Test (以下 TOEIC) を受験する日本人学習者の数は、年々増加しており、その傾向は最近の文部科学省及び各大学の入学選抜方法への見直しをきっかけに、進学を志す高校生にまで広がっている。本学でも TOEIC 受験に関心を寄せる学生は増えつつあるが、対策方法で苦慮している者も少なくない。本研究では TOEIC の応答問題を分析対象とし、アンケートを通じて学生たち自身が当該タスクの特徴で理解を深めることをねらいとしている。参加者たちは Educational Testing Service (以下 ETS) が出版する公式問題集から、TOEIC Part 2 で出題されるリスニング原稿を熟読し、アンケート項目に基づいて所定のタイプに分類した。結果として、大部分が WH 質問や Yes / No 質問でタスクを構成していたが、それ以外の平叙文の混在がタスクの複雑さを高めていることが考えられる。また談話分析の観点からは、発話の関連性の強弱もまた質問の困難度に関係していることが明らかとなった。

キーワード

リスニング、タスク困難度、質問紙法、談話分析、TOEIC® Listening & Reading Test

Abstract

The number of Japanese examinees for TOEIC® Listening & Reading Test (hereinafter called TOEIC) has become larger over the years. The tendency is spreading to the college-bound high school students for the recent reformation of entrance examinations initiated by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) and universities around the country. Many of my students are increasingly interested in taking TOEIC test; however, quite a few of them are apparently at a loss over how to prepare. The present study focuses on the question-response items on the TOEIC Part 2. The current activity through a questionnaire aims to promote students' understanding about the task characteristics. The participants were required to intensively read the listening manuscripts from the official TOEIC workbook published by Educational Testing Service (hereinafter called ETS), and categorized the question items responding to the survey form. The result revealed that most part of the current task was composed by WH-questions and Yes/No questions; meanwhile, such another type as declarative sentences could possibly enhance the task difficulty. The result of analysis also clarified that explicitness of the discourse linking has close relation with difficulty setting.

Key words

listening comprehension, task difficulty, questionnaire method, discourse analysis, TOEIC® Listening & Reading Test

1 はじめに

本研究の対象である TOEIC は、2016 年 5 月実施の公開テストから出題形式が改訂され、Part 1～7 の質問項目群 (タスク) の構成や出題数に変更が加えられた。リスニング・セクションの Part 3 と 4 には、図表を見ながら聴いて答える問題が追加され、リーディング・セクションの Part 7 に至っては、見た目がオンライン・チャットの英文や、従来のダブル・パッセージからトリプル・パッセージといわれる関連する文書 3 つを読

んで設問に答える問題までもが加わった。表 1 は 2016 年の改訂以後から出題されているタスクごとの問題数である。上述の改訂に伴い、リスニング及びリーディングいずれも後続のタスクへの比重が増し、神崎 (2016) によれば、比較的解きやすい問題が減り、しっかり英語の意味を理解しないと解けないものが多くなったと評している。

表 1 TOEIC のタスク形式及び出題数 (2016 年 5 月以降)

セクション	Part : タスク形式	出題数
Listening (約45分)	Part 1 : 写真描写問題	計 6 問
	Part 2 : 応答問題	計25問
	Part 3 : 会話問題	計39問
	Part 4 : 説明文問題	計30問
Reading (75分)	Part 5 : 短文穴埋め問題	計30問
	Part 6 : 長文穴埋め問題	計16問
	Part 7 : 読解問題	計54問

とはいえPart 2は未だリスニング・セクション全問題数から25%を占めており、Part 5の短文問題と並び、学習成果がスコアに反映されやすいと考える言語教師も多いだろう。初歩の学習者が受験準備を始める場合、とりわけ大学に入学して間もない学部1年生に対しては、ビジネス場面で使われる語彙・熟語の多くが未習得である事情から、筆者もまた平素の指導でリーディングのPart 5からの着手を勧めている。本研究で取り扱うPart 2に関しては、音声面で英語の理解力を強化するばかりでなく、綴りや意味を知っている単語でも聞き逃してしまう原因に気づかせられる実用性の高い教材の1つと捉える。井上 (2016) によると、当該タスクの難易度を様々な尺度から調べており、新形式から質問文の語数がより安定した値で収められていることが報告されている。それによると8±2語の範囲でセンテンスが構成され、概ね6語未満の短文や12語以上の長い文にほぼ遭遇しない。こうした均質化 (equating) された出題方針が担保されているからこそ、音声モデルとして学習者に集中して聴かせやすく、音韻論の同化・脱落といった知識がなくても、実践的な体感から気づかせる学びに適していると考えられる。

当該テストは2016年の改訂以前から出題自体に変更がみられない。先行する発言Xが問題文として提示され、その後3つの連続する応答が流れ、その中から最も適切な応答Yを選ぶといった解答方法を旧方式から採っている。ETSが出版している公式問題集には、本体の実践テストに先んじて以下のようなサンプル問題を載せている。

[ETS公式問題集1、サンプル問題Q2, p. 10]

X: How well does Thomas play the violin?

Y: [Answer]

(A) Sure, I really like it.

(B) Oh, he's a professional.*

(C) I'll turn down the volume.

注. * が正解。

上記に類する形式を踏まえ、関連する受験参考書や論文から先行する発言Xの傾向が報告されている。井上 (2008; 2016)

は質問文の種類という定義で公式問題集を検討し、6種類を紹介している。まず出現頻度の高いものでは、①「WH疑問文」と、②「Yes / No疑問文」が挙げられ、統語構造上ではYes / No疑問文と同型ながら、法助動詞could, would等を用いた③「依頼・提案の文」、そして④「選択疑問文」としてwhichを用いないA or B形式を挙げている。他には⑤「付加・否定疑問文」として2種類を括り、⑥「肯定文と否定文」を厳密には平叙文ながら、便宜的な質問タイプの1カテゴリとして扱っている。

上述のとおり、英語音声に触れる負荷という側面では、習熟途上の学習者に適量であり、一定のセンテンス形式に絞って音声モデルを聴き分ける学習過程から、初心者にとって習得目標が明示しやすい言語材料と考える。その一方で、当該タスクには談話分析の観点では、興味深くも指導上で配慮したい言語特徴がある。田岡 (2015) は以下の付加疑問文による出題と応答を例示し、談話の先取りで間接的に“No”で答えていると説明している。

X: You put the stamps in the top drawer, didn't you?

Y: Actually, I just used the last one.

付加疑問文を用いるXの発話から、「質問」よりはむしろ「確認」ありきの発話行為がはたらいっていると推測するのが大方の聞き手の解釈だろう。しかしXの予測を裏返す応答を余儀なくされ、Yは取り急ぎ「修正」(×切手を入れておいた・○使い切った)を試みたと考えられる。談話分析には隣接ペア (adjacency pair) と呼ばれる概念で、例えば「謝罪」—「許容」、「祝辞」—「謝辞」といった連鎖が前提にあり (McCarthy, 1995; Schegloff & Sacks, 1973)、次なる発話が予測できるが、実際の会話では前提に反する現象も起こるものである。しかし仮に“No”または“Yes”の消失が発生しない会話だったとしたら、より多くの受験者が正答に到達するリスニング原稿だと読み取れるのも事実である。

田岡はまた、発話から推論を経て相手の意図を理解したり、限られた情報から元にあるべき会話を構築する能力が必要と説き、次のような平叙文からの例も示している。

X: The mail just came.

Y: Is there anything for me?

ここでの正答Y自体は、確かに状況を理解するのに十分に補完されているが、シナリオ構築はXを聴いた後に委ねるため、適切な応答は無数に考えられるとも指摘している。つまり「今日の郵便は遅かったですね」といった応答さえあり得ると認め、先行認識を持たず聞こえてきた英文から適した文脈決定するタスク特性に、実際の会話との違和感を提起している。

2 本研究の目的と方法

前節で述べられてきたTOEIC当該タスクの特徴について、学生への理解を促すことを目的として本調査に着手した。筆者が本学へ着任して以来、昨今の英語教育改革への関心が学内外で高まるとともに、科目指導を通じたTOEIC受験への対応に課題を認めるべき状況にある。しかし参考書の演習に終始するだけでは、学習者の自主性を育成する機会を欠き、漫然とした作業の繰り返しに陥る懸念がある。そこで、本実践では特に質問紙法を用いての問題分析を平素の学修と併せ、学生が自らの気づきに向き合えるよう試みた。

2.1 言語材料

TOEICの問題分析にはETS公式問題集を使用した。本研究の計画にあたり、2019年度以前に市販されていた公式問題集には、第1集から第5集が市販されており、それぞれ2回分(計200問)の模擬テストが収録されている。この中からリスニング・セクションPart 2の25問に絞り、後述の回答協力者の人数と調査期間からの制約を考慮し、分析対象を第1集(ETS, 2016)、第3集(ETS, 2017)、そして第5集(ETS, 2019)の3冊に抽出した。さしあたり、第2集と第4集を分析対象から外したにせよ、こうした方策を採った主たる理由には、より長期の間隔で出版年度ごとの作問傾向に違いがなかったか検証することを企図したことが挙げられる。

本研究では、上記3冊の模擬テスト2回分から、Part 2は常に問題7~31番の25問ずつに配置されていた。すなわち、延べ6回分から計150問が分析対象に充てられ、後述の協力者による質問紙の回答が、一連の分析データとして用いられた。後述の回答協力者を考慮した場合、全ての学生がTOEICの受験経験者というわけではない実態や、より確実な判定を促すことをねらいとし、担当分のリスニング・スクリプト及び日本語訳を提示した。

2.2 回答協力者

本研究の着手にあたり、英米語及び英米文学を専攻分野とする学部生からデータを収集した。当該学生は筆者が担当する講義科目を受講し、主に応用言語学を基軸とした第二言語習得論や語彙学習理論を学んでいた学部生9名を対象とした。履修期間は令和2年度の春学期(2020年度、5~8月)に置かれ、2週間程度の回答猶予を与えて回収された。国内情勢で周知のとおり、当該期間においては新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大防止策が最優先され、遠隔授業による状況下にあったため、質問紙はオンライン会議ツール(Microsoft TEAMS)によって回答方法を伝達し、メール送受信による電子データで情報を共有した。

2.3 質問紙

学生の回答を集積及び分析するにあたり、付録A(本論文102頁参照)に記したとおり、TOEIC Part 2のリスニング問題に対する延べ18件の判定項目を設定した。この質問紙を作成するにあたり、先行研究で言及されてきたことを踏まえると、TOEICの質問タイプ(question types)には概ね4種類、そして発話機能(speech functions)から5種類があると仮定した。ただし、これらの分類のみでは説明できない要素も認められたため、それぞれに「疑問文ではない」(Q-カテゴリ5)と「分類不能」(F-カテゴリ6)を設けた。また、当該タスクTOEIC Part 2では、最も適切な応答を選択させるにも関わらず、2016年のTOEICの方式に導入される以前から、与えられた質問に期待される返事が正答に充てられているわけではないことが報告されていた(例: 井上, 2008)。こうした実情を留意し、「応答のつながり」(links between responses)の判断には、「結論がみえない」(L-カテゴリ3)もしくは「分類不能」(L-カテゴリ4)とみなす余地を残すことにした。また、最後の回答項目4番目に関しては、個々の問題の「むずかしさ」(difficulty)の判定を求めることにより、協力者から直感的な質問の困難度の推察を募ることとした。

2.4 データ入力と分析

前述と付録Aに示した質問紙から確認されるとおり、質問項目の多くは回答者の主観に委ねられる部分が介在する。こうしたデータ採取の特性を鑑み、それぞれの判定には表2に示した3名ずつの協力者から提供された回答より一致率を算出する。また、個々の問題において分類を決定するにあたり、筆者の判定を含めた4名による回答結果を最終的な判定結果とする。

表2 質問紙の回答割当てと最終判定の方法

回答者	ケース1	ケース2	ケース3	ケース4
1	A	A	A	A
2	A	B	A	A
3	B	C	A	B
筆者	A	B	B	B
最終判定	A	B	A	B

注: 質問紙の最終的な判定結果は、多数決を原則とし(ケース1~3)、同数は筆者の判定を優先する(ケース4)。

3 結果

判定結果の整理に先んじて、協力者3名から算定した一致率を表3に示す。表中の左列から読み取れるとおり、「質問タイプ」と「発話の機能」は2割前後を除けば、大半の問題が学生間の一致した見解で分類できていることが分かった。その一方で、右2列に示した「応答のつながり」と個々の問題の「むずかしさ」に対する判定に関しては、高い一致度を求めることが困難

だった。とりわけ、前者「応答のつながり」はPart 2で出題される中盤から終盤にかけて、正解とされる応答が「間接的」か「結論がみえない」かで、判断の分かれるケースが頻繁に発生していた。また、後者の「むずかしさ」に関しては、個々の英語理解力に影響するため、同一問題を判断する際の結果の不一致が生じたと考えられる。

表3 質問項目の判定一致率

質問タイプ	発話の機能	応答のつながり	むずかしさ
84.00%	74.00%	48.67%	61.33%

注. 算出法は、回答者1×2、回答者1×3、回答者2×3のペアより、下記の一致率を算定し、平均値を求めた。
(全150項目 - 不一致数) / 150 = ペアごとの一致率 (%)

表4は、本研究の分析対象であるTOEIC Part 2におけるリスニング・セクションの判定を、問題集の新旧及び出題順に応じてまとめた結果である。前節2.1で言及したとおり、問題集は左端の列で示した1集・3集・5集で区分し、さらに左2列目では問題集ごとの延べ50問(25問×模擬試験2セット)を「序盤」(8問)・「中盤」(9問)・「終盤」(8問)へと3分割して集計した。

3.1 質問タイプと出題順との関係

前出の表4と併せて図1に示したとおり、対象リスニング・タスクの問題分析について詳述する。棒グラフ横軸の下段に標記したとおり、まず問題の提示順で3分割(序盤 = Q7~14、中盤 = Q15~23、終盤 = Q24~31)で表し、そして横軸の上

段からはETS公式問題集のシリーズ番号(例. Book 1 = 第1集)を示した上で、別個の値としてまとめた。

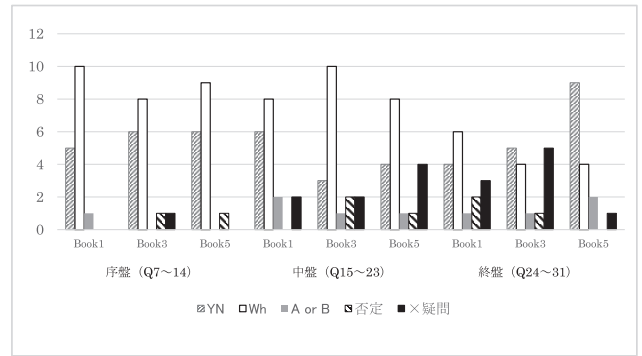


図1 出版年及び出題順ごとの質問形式別の頻度

まず質問タイプごとに分類した結果を概観すると、whichを除くWH疑問詞による質問が最も高い頻度で用いられ、次いでYes / No質問が多いことが明らかとなった。その傾向も序盤から中盤にかけて顕著であり、例えば引用①のような“How long ~?”といった時間の長さを問うWH質問に限らず、該当する人物や物事を問うwhoやwhat、場所や時間、または理由を問うwhere, when, whyといった疑問詞で交互に出題されることが容易に予見できる。またWH質問ほど多くはないが、例えば引用②のようなダンスを「楽しんだか」といった特定の行為や事実の有無を問うYes / No質問も多いことから、情報を絞って聴き分ける理解力を当該タスクの初期で試していることが窺える。

表4 TOEIC リスニング・セクションにおける応答問題の分類結果

		質問形式	発話の機能					応答のつながり				むずかしさ								
			Yes / No 質問	WH 質問	A or B	否定疑問文	疑問文ではない	質問	依頼・お願い	提案	確認	情報や感想	分類不能	直接的	間接的	結論がみえない	分類不能	かんたん	まあまあ	むずかしい
Book 1	序盤	Q7-14	5	10	1	0	0	13	0	2	1	0	0	14	2	0	0	15	1	0
	中盤	Q15-23	6	8	2	0	2	11	1	4	1	0	1	7	8	3	0	4	12	2
	終盤	Q24-31	4	6	1	2	3	8	1	1	3	2	1	5	6	5	0	3	7	6
Book 3	序盤	Q7-14	6	8	0	1	1	11	0	3	2	0	0	10	5	1	0	11	5	0
	中盤	Q15-23	3	10	1	2	2	14	1	1	1	1	0	8	5	5	0	3	14	1
	終盤	Q24-31	5	4	1	1	5	6	1	1	4	4	0	7	6	2	1	1	12	3
Book 5	序盤	Q7-14	6	9	0	1	0	10	1	1	4	0	0	11	3	2	0	5	11	0
	中盤	Q15-23	4	8	1	1	4	9	0	1	4	4	0	8	6	4	0	3	14	1
	終盤	Q24-31	9	4	2	0	1	11	2	1	1	1	0	4	8	4	0	0	16	0

引用①：Book 1 Test 1 Question 9 (別冊解答p. 8)

How long will it take to fix the copy machine?

- (A) About an hour.*
- (B) Once every two weeks.
- (C) Sure, I can fix it.

引用②：Book 1 Test 1 Question 10 (別冊解答p. 8)

Did you enjoy the dance performance last night?

- (A) A ballet company from Argentina.
- (B) Yes, it was even better than I expected.*
- (C) A few more nights.

またTOEIC Part 2ではwhichを用いることなく、下の引用③に類する「A or Bタイプ」として二者択一の応答を求める質問が散見されるが、今回の問題集から調べた範囲では1冊あたり2問から多くて4問だった。同様に「否定疑問文」も2～3問と、これら少数派の質問タイプを合わせても、出題される確率は1割程度であることが推測された。

引用③：Book 1 Test 2 Question 10 (別冊解答p. 99)

Would you rather drive to the game or take the train?

- (A) Let's drive.*
- (B) On Thursday, I believe.
- (C) Please take it with you.

一方で、「疑問文ではない」発言から始まる出題が中盤以降で混在し、初歩のTOEIC受験者にとってリスニング対策で戸惑う要因の1つに挙げられている。というのは、疑問詞を聞き分けることで要求される情報の種類を予測していた学習者にとって、従来のリスニング方略のみでは対応不能に陥るためである。引用④で一例を示すと、それまで質問で開始していた出題の流れが突如、平叙文に切り替えられ、瞬時に聞こえてきた内容から状況を把握できる理解力が求められることがある。

引用④：Book 1 Test 1 Question 29 (別冊解答p. 12)

We'll have to cancel the company picnic.

- (A) Two days before the event?*
- (B) Which catering service?
- (C) Yes, they had one.

こうした引用④と同じ分類としては、問題集1冊あたりで少なくとも5問、最頻の第3集では8問が確認された。確かに試験1回あたりの割合に換算すれば、Part 2で出題される25問のうち12% (18件/全150問) とけっして高確率ではない。しかしながら、連続する質問文の間に点在する例外であるからこ

そ、例えば文頭に出現しがちな疑問詞のみに傾聴するだけでは、熟達した聞き手には未到達であると暗示するような出題の意図が窺われる。

3.2 発話機能の種類と傾向

次に、先行する話し手Xがどんな意図を含んで発話しているのか、協力者にリスニング原稿を注視しつつ判断を求めたが、その結果を視覚的にまとめたものが図2である。概ねPart 2の序盤から終盤まで、どの局面でも「質問」が最頻値を示し、出版年の比較的新しい第5集からは散発ながら「確認」・「情報」を意図したとみられる発言が観測された。とはいえ、それらの頻度は多くて4問と、有意に扱うべきか意見の分かれる値といえるだろう。それぞれの機能を含んだ一例を与えると、以下のような対話が該当する。

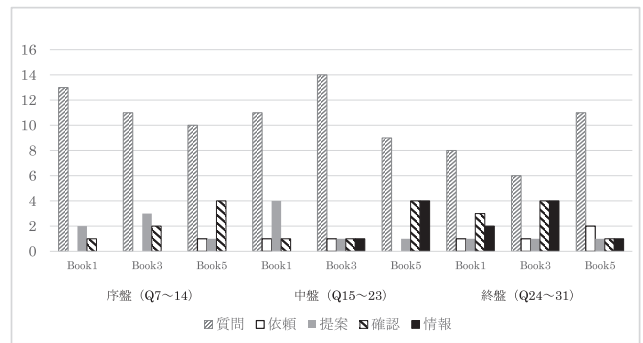


図2 出版年及び出題順ごとの発話機能別の頻度

引用⑤で示したように「確認」を含んだ発話の中には、否定疑問文の形が多くみられ、当該の質問タイプと発話機能が連動して用いられる傾向にあるかもしれない。一見するとYes / No質問と判断される可能性も否めないが、正答である(A)の応答で場所の情報提供が加わっていることから、話し手Xは「買った」(did...buy)という行為より、買った物品の所在を尋ねたかった意図が読み取れる。

引用⑤：Book 5 Test 1 Question 9 (別冊解答p. 8)

Didn't we buy more blue fabric dye?

- (A) Yes, it's in the storeroom.*
- (B) Would you like a bag for your purchase?
- (C) Any day of the week is fine.

引用⑥からは、冒頭から話し手Xが情報を提供する状況とみられるが、前述3.1で言及した「疑問文ではない」タイプにも属する。よって、質問文の連続を断ち切って、平叙文から開始するといった難題パターンにも該当するだろう。おそらく話し手Xは会社もしくはイベントの案内係だろうと理解し、正答

(B) から応答した当人が「間違っ経路」(the wrong way)を進んでいたと即座に把握することが求められる。

引用⑥：Book 3 Test 2 Question 27 (別冊解答p. 105)

The CEO's presentation is in Conference Room C.

- (A) This book makes a great present.
- (B) Oh — I was headed the wrong way.*
- (C) On the last page.

情報の提供以外に「疑問文ではない」タイプからは、話し手Xによる感想が述べられる場面もあり、状況にふさわしい応答を瞬時に聞き分けて選択する能力が求められる。疑問文に対峙する学習者の多くは、文頭の形式や用いられる疑問詞に注意を向けることで、相手に期待される情報を絞り込むことが考えらる。しかし、引用⑦のように疑問詞を用いない発話が前触れなく提示されると、準備していたリスニング方略が破綻し、ひいては解答不能に陥るケースとなることは容易に推測できるだろう。

引用⑦：Book 5 Test 1 Question 25 (別冊解答p. 12)

I'm pleased so many employees are coming to the budgeting seminar.

- (A) Right—many people signed up.*
- (B) The bank on the corner.
- (C) Pleased to meet you.

3.3 質問と応答のつながり

分析対象であるTOEIC Part 2のリスニング問題は、一連の発話と応答が1ターンのみで終わるため、英語音声に触れる認知負荷は小さいと捉えられるが、判断材料が少ないことによるむずかしさもある。とりわけ発話Xと応答Yとが明らかに対応した会話もあれば、真意を推察して理解する必要のある会話も散見される。図3は「応答のつながり」の分かりやすさを判定した結果の要約だが、概して出版年の新旧に関係なく、序盤は会話のつながりが「直接的」に認められる問題が多いとみられる。

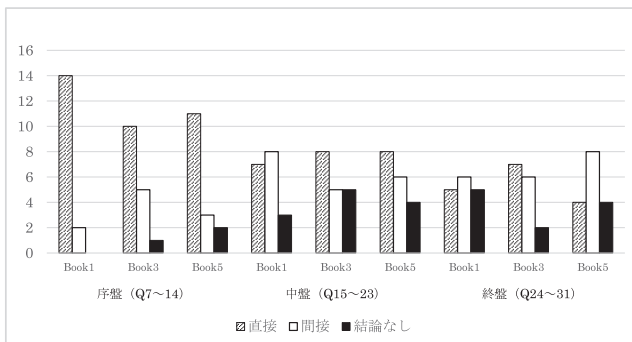


図3 出版年及び出題順ごとの発話と応答の関連性の変化

一方で、中盤以降では「間接」的な質問や「結論なし」の応答が出現し、その分「直接」的な応答が減少していることが分かった。典型的な直接対応した応答例を挙げるなら、上述のとおり問題集の序盤で多くが確認できる。引用⑧のように疑問詞whereを基点に期待される情報としての「場所」を聞き分けることができれば、正答(A)に到達することは難しくない。

引用⑧：Book 1 Test 2 Question 8 (別冊解答p. 99)

Where is the furniture department?

- (A) On the tenth floor.*
- (B) A sofa and two chairs.
- (C) I took it apart.

間接的な対応を示すなら、例えば引用⑨のような応答を取り出すことができる。発話Xは疑問文の形式ながら「依頼・お願い」の機能を含んでいる。この依頼に対するYの応答に“Yes.”や“Sure.”等といった受諾表現が認められないが、「あとで時間が空く」という応答から引き受けていることが理解できる。

引用⑨：Book 1 Test 1 Question 17 (別冊解答p. 10)

Could you take these packages to the post office?

- (A) I'll be free after my conference call.*
- (B) They're packaged by the dozen.
- (C) I haven't received any mail.

今回の質問紙判定から分析した限り、結論のない応答は出版年の比較的新しい版で序盤からも散見されたが、その多くは中盤から終盤に出現する傾向が強いとみられる。観測した割合は全体の2割弱(26件/全150問 = 17.3%)に留まるが、質問から予測していた情報要素が聞こえてこない場面に遭遇するため、受験者の戸惑いを誘う作問パターンの1つとして指摘する参考書も少なくない。典型例として、応答Yが発話者Xの期待する情報を持ち合わせていないケース(引用⑩)や、特定の手続きや作業が未完結で回答できない場面(引用⑪)等が挙げられる。

引用⑩：Book 3 Test 1 Question 23 (別冊解答p. 11)

Does our budget include funding for one assistant or two?

- (A) I didn't know we were hiring anyone.*
- (B) At the reception desk.
- (C) It was paid for in cash.

引用⑪：Book 5 Test 2 Question 27 (別冊解答p. 109)

How many people are coming to the conference?

- (A) Sometime this afternoon.
- (B) Registration's still open.*

(C) It's by the convention center.

上述のとおり、発話Xと応答Yには明白なつながりの認められるペアもあれば、あるべき隣接ペアの省略によって明瞭さを抑えた会話、さらには結末や目標に達したとはいえない会話場面さえみられた。実際の会話でもこうした談話ルールの前提が必ずしも守られるわけではなく、会話の関連性や結束の強度に対する捉え方は個人差がある。むしろ、TOEICリスニング・セクションの出題原稿の中には、こうした会話の関連性の強度や隣接ペアの明瞭さを操作することによって、難易度の調整を実現可能にしていると考えられる。

4 考察

前節で報告したとおり、今回の研究対象からTOEIC Part 2に出題される質問の大部分はWH疑問文で構成していることが明らかとなった。一般に、WH疑問文は「開かれた質問」(open-ended questions)とも呼ばれ、Yes / No疑問文のような「閉ざされた質問」(close-ended questions)より応答できる情報量や捉えるべき視点が広がるため、リスニング問題の難易度が相応に維持されている。言い換えれば、WH疑問文を最も高い頻度で遭遇させるからこそ、当該パートの大部分では「5 W 1 H」と称される情報を整理した聴解力を試されているとも考えられる。

その一方、TOEICの受験を志して間もない初歩の学習者への提案として、上述のケースに当てはまらない応答問題には注意を払うべきだろう。特に連続した質問文の中に混在する平叙文による発言は、それまで培った質問文に向けた正答の導き出し方にも錯乱を与える可能性がある。また、当該パートでは「1つの質問または発言に対し、3つの応答を聞かせる」という統一された形式による制約から、1ターンの中で結末に至らない会話も不可避であり、実践的ながらも腑に落ちない場面さえ遭遇する。こうした負の学習経験から出題パターンへの不信感を抱かせないためにも、質問タイプや発話機能といった前提となる知識を提供し、それぞれに応じた会話方略や適切な応答への到達方法に気づきを促すことが望ましいだろう。

最後に、本研究で用いた質問紙について振り返ると、前節3の表3で報告したとおり、一致率の確保が充分といえない判定項目もあった。とりわけ質問の難易度について判定を求める場合、協力者が有している英語習熟度や、当該テストに対する受験または学習経験による影響は大きいと思われる。こうした主観的な判断を介したデータを集計するにあたり、十分な評価トレーニングを積んだ熟達者や、英語指導や言語テストの出題経験の豊富な専門家を介して信頼性を高める必要があるだろう。しかしながら、今回の取り組みに協力した学部生にとっては、実際にTOEICリスニング・セクションの分析に携わることで、

アクティヴ・ラーニング特有の主体的な思考を活性化し、当該テストに挑戦する姿勢にも前向きな変容へ結びつくことを期待したいと思う。

5 引用文献

- 井上治 (2016) 「TOEICテストの新形式問題におけるパート2の難易度を推察する」生駒経済論叢14, 133-145.
井上治 (2008) 「TOEICテスト初級者のためのリスニング・セクションパート2攻略法再考」生駒経済論叢6, 185-201.
神崎 正哉・Warriner, D. (2016) 『TOEIC TEST 新形式模試 はじめての挑戦』東京：やどかり出版
田岡育恵 (2015) 「TOEIC Part 2におけるシナリオ想起力」Memoirs of Osaka Institute of Technology 60, 33-39.
McCarthy, M. (著), 安藤 貞雄・加藤 克美 (訳) (1995) 『語学教師のための談話分析』東京：大修館書店
Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973) Opening Up Closings. *Semiotica* 8, 289-327.

6 参考資料

- Educational Testing Service (2016) 「公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集vol. 1」東京：国際ビジネスコミュニケーション協会
ETS (2017) 「公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集vol. 3」東京：国際ビジネスコミュニケーション協会
ETS (2019) 「公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集vol. 5」東京：国際ビジネスコミュニケーション協会

付録A 質問紙1 判定方法の指示と選択肢

TOEIC Part 2 の問題を次のとおり定型化した場合、
 それぞれの話し手をXさん・Yさんとします。
 Xさん：《 問題文 》
 Yさん：《 正解 》

問題文と正解の応答を読み、次の4つの要素で当てはまるタイプを選んでください。

Q 質問形式

1. Yes / No 質問
2. WH 質問
3. A or B の2択質問 (Whichは除く)
4. 否定疑問文 (~ではないのですか?)
5. 疑問文ではない

F 発話の機能

1. 質問
2. 依頼・お願い (~してくれますか?)
3. 提案 (~しましょうか?)
4. 確認 (相手が確信や予想・期待を込めている場合)
5. Xさんは情報や感想を述べているだけ
6. 分類不可能

L 問題文と正解の応答は...

1. 直接つながっている (When→時間・日時; Where→場所; Who→人物)
2. 間接的・察しが必要 (例: ジェットコースターに乗ろう→乗りもの酔いするんです)
3. 求める回答や結論がみえない (例: Yさんが質問に答えられない/聞き返し)
4. 分類不可能

D 正解に到達するまでの個人的な感想

1. かんたん
2. まあまあ
3. むずかしい

付録B 質問紙2 回答フォーマット

	Q 質問タイプ	F 発話の機能	L 応答のつながり	D むずかしさ
	疑問文ではない 否定疑問文 A or B WH 質問 Yes / No 質問	分類不可能 情報や感想 確認 提案 依頼・お願い 質問	分類不可能 結論がみえない 間接的 直接的	むずかしい まあまあ かんたん
7	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5-6	1-2-3-4	1-2-3
8	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5-6	1-2-3-4	1-2-3
9	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5-6	1-2-3-4	1-2-3
10	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5-6	1-2-3-4	1-2-3
:	:	:	:	:
:	:	:	:	: